

特集《知財と英語》

ツールとしての英語を身につける1つのアプローチ



会員 柴田 富士子

要約

中学校から大学まで10年くらいは、英語を学びます。その間、特別な英語教育を受けなくても、留学をしたことがなくても、基礎は出来ていると思います。これまで、一見して越えられるかどうかかわからないように見える山が「英語を使う」という場面で幾つも現れましたが、なんとか越えてきました。トライしてみると意外と越えられるということ、越えるために必要なアプローチの例を経験からお話したいと思います。

上手な英語を使いこなせるにこしたことはありませんが、必ずしもそれが必要な訳ではありません。的確な質問をすることができ、出願人の意図を明確に伝えることができればよいのです。「仕事で使う英語はツールである」と割り切って、楽しみながらこれからも磨いていきたいと思っています。

目次

1. はじめに
2. 英語との出会い
3. 会社時代の英語とのかかわり一次々に山が現れる旅
 - (1) 英語が書けない!という1つ目の山
 - (2) 英語が短時間で読めない!という2つ目の山
 - (3) 英語が話せない!という3つ目の山
 - (4) ネイティブスピード英語が聞き取れない!という4つ目の山
 - (5) 4つ目までの山越えに必要なものは何か?
 - (6) 英語が書けない!という5つ目の山の登場
 - (7) 知財の業界に入ってから一今でも続く山また山一
4. 弁理士に求められる英語はどのような英語か?
5. 苦手意識を克服してツールとして使おう

1. はじめに

現在、国際活動センター外国情報部米州担当副センター長、アジアセミナー(写真)の講師、知的財産の講師等を務めており、仕事も含めると、年に何度かは英語のプレゼンテーションを行うようになりました。特別な英語教育を受けたことなし、留学経験なし、英会話歴2年、テクニカルライティング歴2年半。それでも、いつしか、仕事の話では突っ込んだ議論もできるようになり、国際電話がかかってきてもあたふたすることはなくなりました。

まったなしの状況で必要に迫られると、思った以上に書けるようにもなるし、話せるようにもなるものだと実感しています。無論、レベルが少し上がると、足

りないところもたくさん見えてくるため、あーあ、まだまだだなあ、と思いながら、少しだけ努力をすることを繰り返しています。

仕事や会務で英語とかかわる機会も次第に多くなる昨今、どのようにしてツールとしての英語を身につけてきたかをお話したいと思います。



(写真は2017年2月ハノイ開催のアジアセミナー講師としての一コマ。参加者は非常に熱心で、休み時間も質問攻めでした。朝から夕方まで、お昼を挟んで、クレームドラフティングとOAの応答をみっちりディスカッションします。あちこちに飛びそうな議論を引き戻すのがなかなか大変ですが、参加者から沢山エネルギーをもらえた、実り多いセミナーでした。)

2. 英語との出会い

最初に書いた通り、小学校から高校までは公立、大

学は国立でした。ごく普通の学生でしたから、特別な英語教育を受けたことはなく、無論、留学経験もありません。

初めての英語との出会いは、小学校入学前でした。近くに米軍キャンプがあり、ある一家と知り合って、その一家の子供達4人(12歳から4歳)と毎日のように遊んでいました。当時私は5歳でしたから、「Yes」、「No」、「Thank you」、「Hello」、「Bye-bye」がボキャブラリーのすべて。それでも大丈夫、十分楽しく遊んでいました。大人同士が話していることは、ほとんど聞き取れませんでした。生の発音に触れる機会があったことは、その後、随分と役に立ったと思います。

小学校時代は特に何もしないままに過ぎ、中学生になって英語の授業が始まりました。このときの先生は、中学校の先生には珍しく、東京外語大の出身。発音がきれいなあと聞いていました。その先生から、「とにかく、英米人が話す英語を聞きなさい。基礎英語は聞いた方がいい。」と言われ、ラジオ基礎英語を聞き流すようにしていました。じっとテキストを見ながら聞くのではなく、ただただ聞くだけ、という横着なものです。

また、毎週、セサミストリートをテレビで見ました。当時は、今と違ってテキストはなく、画面を見ながら聞くしかありません。俳優が話す英語はまだ聞き取れるのですが(とはいっても、意味が分かるわけではありません。半分、想像(もしかすると妄想)しながら、聞いていました。)、クッキーモンスターの英語は「オー、クッキー！」ぐらいしか聞き取れず、音がこもると聞き取れないなあ、と思ったことを覚えています。

それでも、3年も聞き続けているとだんだんわかるようになってきて、高校生になる頃には、ほぼ聞き取れるようになっていました。

高校時代に恵まれていたなあと思うのは、ランゲージラボが校内にあり、2週間に1度、英語を聞く機会があったことです。エドガー・アラン・ポーの「黒猫」は、「ギャアアー！」という効果音付きで迫力満点。「怖いよ～、もう聞きたくない…」と耳をふさぎたくなった授業でした。

当時は、今のように英会話教室があちこちにある訳でもなかったため、とにかく「英語を聞いて」いました。他愛もないことですが、毎晩のように、ビートルズ、カーペンターズ等のレコードを聞いていました。

歌詞カードを見ながらメロディーに合わせて、全ての単語を読むように歌ってみると、必ず単語が2つ3つ余ります。「どの単語をどう発音すると余らなくなるのかな？」と何度何度も繰り返し聞いているうちに、だんだん「なるほど～。そう発音すればいいんだ～」とわかってきます。メロディーに合わせて歌えるようになったとき(=歌詞が余らなくなったとき)には、思わず小さなガッツポーズ。結構な達成感がありました。ある曲を歌いきれるようになると面白くなって、次々とトライをしていきました。

その後は、レコードを聴いて歌詞を書き起こす、という作業をしていました。これは面白くてやっていただけだったのですが、リスニングのいいトレーニングになったと思います。

また、英語の授業で読まれたサイドリーダー以外に、日英対訳の短い物語の本を何冊か読みました。短いものだと最後まで読み切れるため、達成感が得られると同時に「これぐらいのものなら読めるんだ」という自信にもなりました。

3. 会社時代の英語とのかかわり—次々に山が現れる旅—

(1) 英語が書けない！という1つ目の山

最初に、英語で書くことを求められ、書けなくて困ったのは就職のときでした。会社に提出する書類に、卒業研究をサマライズして英語で書く欄があったため、指導教官に見てもらうことにしたのですが、最初に言われたのは「日本語で書いたものと英語で書いたものを一緒に持ってきなさい。」ということでした。持って行ったところ、一読した先生が一言、「君、英語になる日本語が書けていないよ」。があ～ん、です。

それでも何とか、その会社(外資系)に入ることができ、ほぼ13年間を研究員として過ごしました。

(2) 英語が短時間で読めない！という2つ目の山

入って早々、社内のサーキュレーション(回覧)は英語の書類であることに愕然。モタモタ読んでいると「遅い」と怒られ、斜め読みができないため、適当に読み飛ばしていると、「読んだというチェックがついているのに、なんでこれを知らないんだ！」と怒られるという、泣きたいような状況に陥りました。

どうしようと思っても、読むしかありません。実験の合間を縫って、必死で読んでいるうちに、どこに何が書いてあるかがわかってきます。ああ、そうなの

か、と分かったとたん、短時間で読めるようになりました。

(3) 英語が話せない！という3つ目の山

以上のように、読む方は3ヶ月もすると何とかできたのですが、次に困ったのは、「必要最低限のことすら、英語できちんとは説明できない」ということでした。

私が就職した会社には、当時、日本以外に、3つの研究所(2つのInstituteと1つのResearch Center)がありました。毎年、春(桜の咲く頃)と秋(紅葉の綺麗な時期)に、海外の研究所から数人が来日します(当時の流行をもじって、我々は「ディスカバージャパンツアー」と呼んでいました)。当然のことながら、ラボにもやってきます。

彼らは、ラボツアーと称して、突然、来襲して来るのです。ノックの後、「ハロー、名前は？今、何を研究してるの？」、「このところは、具体的にはどうやってるの？」、「面白い結果は出てる？」等と矢継ぎ早に質問をしてくる。初めての時は、頭は真っ白、名前を言って、「〇〇についてこういう研究をしています。こんな結果が出ています。」というのが精いっぱい。彼らは前触れもなく現れるので、頭の中でのシミュレーションも間に合わず、「え～、もう来ちゃったの？」と、慌てふためくこともしばしば。ボキャブラリーも足りず、彼らを見送った後はどっと疲れが出る、という状態でした。

また、「電話は新人が取るように。」とのお達しに従って、夕方かかってきた電話を取ると、スイスの本社から上司宛の国際電話。想定外の英語の電話に、受話器を持ったまま電話口で口をパクパクさせるばかり。言葉が出てきません。上司が近くにいる場合はいいのですが、いない場合には、もう大変。「このままお待ちください。」って英語で何て言ったっけ？後で、調べてメモを作り、電話の傍に置くことにしました。

本社からの電話は、夕方、16時過ぎにかかってくることが多い、ということがわかってくると、電話が鳴ってもなかなか取れません。そのうち、外国からの電話と国内からの電話とでは、呼び出し音が違うことがわかってきましたが、そうなる、余計に外国からの電話は取りたくありません。どこのラボでも、新人は、鳴っている電話を遠巻きに見ていて、誰かが意を決しておそろおそろ手を伸ばす、という状態だったと後で聞きました。

(4) ネイティブスピード英語が聞き取れない！という4つ目の山

入社3年目で参加した国際学会。発表はすべて英語ですが、日本人の研究者に共通するものがありました。質疑応答の途中で立ち往生してしまうのです。発表後の1つ目の質問に対しては的確に答えていた発表者が、関連する2つ目の質問、3つ目の質問になると、なかなか的確に答えられなくなっていきます。質問者もヒートアップしてくるため、早口になり、質問が聞き取れなくなって、答えられなくなるようでした。

入社3年目のひよっこでは、最初の質問を聞き取るだけで精一杯。その後のやり取りは、すごいなあ、と思いつつ見ているだけです。海外の研究者は、英語が母国語ではなく、どんなにお国なまりの強い英語を話す人でも、堂々とプレゼンをし、どんどん質問をして議論をしていきます。聞く方も話す方も、相手の言っていることを理解できているのです。この違いは一体なんだろう、と考えるきっかけになりました。

(5) 4つ目までの山越えに必要なものは何か？

電話にびくびく、ディスカバージャパンツアーをはじめとする突然の外国人の訪問(襲来?)にあたふた、英語の質問にどきどき、ということをつつまで続けていても仕方ありません。

この山を越えるには、訓練が必要であると考えて、手始めに、英会話のクラスに申し込みました。地元の小さな英会話スクール(1クラスの生徒数が6人になるとクラスを分けることになっていました)だったため、話す時間は多く取れましたが、最初の頃は話題を考えることも、話すことも、大変でした。

少し話せるようになった時に、英会話クラスの先生に、「英会話を教えている外国人が集まるお店があるけど、行ってみる？」と言われて行ってみました。それまで習った英会話が役に立ちません。原因は、色々な音がしている環境で会話をしていなかったことでした。英語のBGMが流れていて、そこそこで外国人達が話をしており、一生懸命聞いていても半分も聞き取れるかどうか。「聞き取れない。」と先生にはやいたら、「教室は静かだけど、実際にはこういう環境で話す方が普通でしょう？」と言われて納得。3ヶ月ほど頑張ってみたところ、ある日、スイッチが入るように聞こえてきました。「聞こえる！」。感動でした。耳が慣れるのに、そのくらいかかったということだと思います。2年半くらいで一応は話ができるようになった

ので、このクラスはそこで終わりにしました。

(6) 英語が書けない!という5つ目の山の登場

この次に、困ったのは、「書けない」ということでした。入社して5~6年目になると、四半期の研究の進捗状況を英語で書かなければなりません。ところが、日本語を直訳すると、書こうと思ったこととずれている文章になるのです。中学生から大学卒業まで、通算すると10年以上英語を学んでいて、英作文も嫌いじゃなかったはずなのに、書けません。それまでの山と比べると、はるかに高い山で、いよいよ、ジャジャーンという効果音付きでラスボス登場という状態です。このボスとは、未だに戦い続けています。

困ったなあ、と思っていたところに、朝日カルチャーセンターにテクニカルライティングのクラスがあるという話を聞き、このクラスを受けてみることにしました。受けたクラスは、別名、サバイバルクラス。先生は、カリフォルニア大学バークレイ校の卒業生で(米国人)、文科省等のスピーチ原稿を英訳しているという強者でした。

このクラスの授業では、A4半頁くらいの日本語の文章を英訳し、日本語と英語の両方を皆に配布して「なぜこの文章を選んだのか」、「この日本語のセンテンスをなぜこういう風に訳したのか」等を、英語で説明します。途中で説明に詰まって日本語をしゃべると、「Speak in English!」と注意が飛んできます。説明できずに立ち往生したことは数えきれず、提出した文書は直して真っ赤。なんでこんなに書けないんだろう、とがっくりの連続でした。

講師の先生は、日本語の読み書きには不自由はなく、会話もできる人なのですが、2時間の授業中、一切日本語を使わせてくれません。

こちらの言いたいことがわかっているのに、英語で説明できるまで、首を縦に振ってくれない先生に、どうやって首を縦に振ってもらうか、悪戦苦闘の日々でした。石になりたい…と思ったことは数知れません。

この「サバイバルクラス」の授業で言われたのは、「英語にできる日本語の文章を書くことが重要であること」と、「英米人に対して、学校時代にならった日本語の作文の作法で書いた日本語を、そのまま英語にした文章で説明をしても、理解してもらうのは難しい。」という2つのことでした。

書こうと思っても思ったように書けないことに気づいて頭を抱えていた研究の進捗状況の報告(3ヶ月に1

回)も、このクラスを受けてから、だんだん書けるようになってきました。

このクラスで学んだことは、今も仕事に大変役立っています。学んだことを整理してみると以下のようになります。第1に英語の文章はパラグラフ立てが重要であるということ。第2に、各パラグラフの中の文章も書くべき順番があり、最も重要なことをトピックセンテンスとして最初に書き、そこで書いたことの原因又は具体例をセカンドセンテンスに書くということ。第3に、1つのパラグラフでは1つのトピックセンテンスに関わることだけを記載する(扱った主題は1つだけ)、ということ。説明すべきことが多くて書ききれないようなときは、パラグラフを分けること、その際には、大きな概念からより具体的な概念に向かうように、一方通行の流れで書くようにする、ということです。

イメージとしては、大きな三角形からだんだん小さな三角形が並ぶように書いていくことになります。「ロジックとして後戻りをするな」とよく言われました。

英米人である程度以上の教育を受けた人達は、このような書き方を習慣づけられているため、このような書き方をしないと理解されにくいということがわかって、対処の方法が見えてきたと思いました。

学術論文を魚に例えると、アブストラクトが頭、各パラグラフのトピックセンテンスが背骨、に当たります。トピックセンテンスにうまく肉付けをしていくと、綺麗な形の魚が一尾できあがるはずなのです。なお、ここでいう「肉付け」は、修飾子を沢山使うということではありません。そのトピックセンテンス(骨)にまつわる事柄を、大きな枝の元の方(大概念)から枝先(下位概念)に向かうように順序立てて書いていく、ということです。

仕事で使う文書を書くときには、この魚一尾のイメージを頭に浮かべています。背骨がうまくはまらないと、魚の形がどうにも綺麗になりません。尻尾がつかなくなったり(文字通りの尻切れトンボ)、尻尾があっちを向いたり、と歪になります。形を綺麗に整えるために、背骨がうまく収まるように入れ替えをする、時には、その骨を削って、背骨に別の骨をもう1つ足す、というような作業をすることになります。

日本語は、よく言えば融通無碍です。日本語の文章を読んでいて、途中で「んんん?」となることはない

でしょうか。ある枝の枝先に飛びついて、幹を目指して辿って行ったはずなのに、気が付いたら幹ではなく、別の枝の枝先に出ているというような場合です。これが、卒研でお世話になった先生に言われた「英語にできる日本語が書けてない」ということの意味だったのだと、このクラスを受けてみて納得しました。

こういう「そのままでは英語にできない日本語の文章」を英語に直訳してしまうと、見た目は英語なのですが…ということになってしまい、英米人には「何を言いたいのかわからない」と言われてしまいます。

「英訳を始める前に、その日本語の文章をよく読んで、リライトが必要かどうかを見極め、必要に応じてリライトする」ことが重要で、「僕の仕事の50%は日本語のリライトだよ」と、講師が苦笑いをしていました。

こういうことがわかった後、会合の席上でも、英語の文章を書くのと同じ要領で説明をすると、噛み合った議論が成り立ち、納得してもらえることが多くなったと思います。

(7) 知財の業界に入ってから—今でも続く山また山—

そこそこ英語はわかっているつもりでこの業界に入ったものの、最初の頃は基本的な知識も、ボキャブラリーも足りません。頭の中はいつも疑問符だらけでした。

ただ、英語が使えるということは、一つのアピールポイントにはなるだろうと考えて、できるだけ、外国法の勉強会等にも参加するようにし、わからないことはその場で質問をするようにしていました。日本の制度がわかってくるのと並行して、少しずつボキャブラリーも増え、日本の制度と外国の制度等との相違点が見えてくるようになりました。

当たり前のことですが、クライアントに外国案件での問題を説明するには、日本の制度を基準として、違うところを説明することになります。そうした説明ができる（アウトプットできる）形で、色々な外国案件に関する情報をインプットすればいいのだ、と気が付いてからは、それまでに比べるとかなり楽に色々な情報をインプットできるようになりました。

現在の仕事は6~7割程が外国案件です。事務所の規模が小さく、特許、商標の両方とも扱っているため、色々な場面で英語を使わざるを得ない状況です。

内外案件の場合、まず挙げられるのは、PCTの各国

移行の場面です。現地代理人へのオーダーレター、委任状、宣言書等の確認、国際出願日における明細書・請求の範囲・必要な図面の英訳、国際予備審査を請求した場合には、34条補正書・差替頁・答弁書の英訳、そして、日本語で記載された文献しかない引例が国際調査報告や国際予備審査報告で挙げられている場合には、それらの英訳、といった作業があります。また、各国段階に入った後には、各国特許庁からの拒絶理由通知の確認（英語圏以外からは、英語の訳文をもらうように現地代理人に依頼しています。）、クライアントから依頼があれば、拒絶理由通知の和文サマリーの作成、補正案（日本語又は英語）、及びリマークスの翻訳（英訳）等の作業も発生します。

外内案件の場合には、日本国特許庁からの拒絶理由通知の英文サマリーの作成、補正案の作成、必要な引例の英訳を作成し、コメントを記載したレターを外国クライアントに送付するという作業があります。審判請求をする場合には、理由及び根拠の確認、審判請求書案の英訳、提出した審判請求書の英訳、クレームの補正案又は訂正案の作成、その説明等を記載したレターの作成と送付といった作業が発生します。

こうして書いてみて、実に様々な場面で英語を使って仕事していることを改めて実感しました。

私の仕事では、実に色々なことが起こります。外国クライアントから「マドプロで拒絶査定になったから、何とかして!」というメールが来たことがあります。「え〜、拒絶査定になっちゃったの?」です。どうやら、自社で出願したものの暫定拒絶通報が来てしまい、どうしたらいいのかわからないまま拒絶査定になってしまったようでした。「次回は、拒絶査定になる前に連絡してくださいね。」と返事を返したものの、期限まであと1週間、しかも区分数が多い…。もうやるしかありません。なんとか間に合わせました。

朝、パソコンを立ち上げたところ、米国代理人からのメール（拒絶理由通知）数件（引例多数、しかもOAが長い!）、ベトナムの代理人からの特許査定メール1件、中国代理人からの拒絶理由応答期限のリマインダー、タイの代理人からの年金納付期限の連絡等が、どさどさっと入ってきていて、思わず、はあ〜と溜息が出たこともありました。

色々な通知への応答の作成や、現地代理人への説明、又は外国クライアントへの説明等をせっせと英語で書きながら、どこまでも山が続くなあ、と感じます。

どうせ越えなければならない山ならば、少しでも楽に越えたいものです。最近では、以前より、少し山の傾斜が緩くなってきたような気がしています。

4. 弁理士に求められる英語はどのような英語か？

あるとき、どんな英語が必要なのだろう、という疑問がふと浮かんできました。

英文明細書や引例を読むことは必要です。書くこともできた方がいいに決まっています。では、何のために英語で記載されたものを読み、英語のレター等を書くのでしょうか？

色々を考えるうち、必要な情報を得るために読み、わからないことを聞くために書く、というあたり前の結論に至りました。もとより普通の英語教育しか受けていないため、しゃれた言い回しや気の利いたレトリックを使って書く、というようなテクニックは持ち合わせていません。シンプルに書く以外の選択肢はないのです。リストにまとめる、表を入れる、図を使って説明する、というようにして、一文が40語、50語というような長い文章は、できる限り書かないようにしています。

また、現地代理人に何かを聞くときには、クローズドクエスション（Yes 又は No で答えられる質問）にすることを心がけています。例えば、「日本の審査実務ではこのケースはこのように考えるが、そちらの国の審査についても同様と考えていいですか？」というような質問の仕方です。このような質問をするときちゃんと答えが返ってきますが、そうでないと、答えが返ってこないことが多いと思います。彼らも忙しいので、ポイントを絞ってシンプルな英語で質問をすることが大切です。

拒絶理由応答の時には、こちらの意図を根拠と共に明確に伝えると同時に相手の裁量の範囲も明記することが大切です。そうすると、「出願人の意図するところをよりはっきりと主張するためには、ここはこうした方がいい」というようなアドバイスも貰えると思います。

英語のプレゼン、アジアセミナーでの講義の後の質疑応答及びテーブルセッション等を経験してわかったことは、相手が聞きたいことは何なのかということを知り出すことの大切さです。鋭い質問の場合には「いい質問ですね」と答えて時間を稼ぎつつ答えを考えま

す。ポイントがよくわからない質問の場合には、「あなたが聞きたいことはこの点ですか？」と整理すれば、「そうです」又は「その点ではなくて…」というような答えが返ってくるので、大抵は答えられます。答えられない質問に対しては、「お答えする情報を持ち合わせていないので、答えられません」等と答えることにしています。要は、その場である程度のコミュニケーションができれば十分なのだと思います。

つまり、仕事では、実用的なツールとして使える英語が使えればよい、ということになります。

5. 苦手意識を克服してツールとして使おう

学生時代のことを振り返ってみると、輪講で担当分を発表するという事は研究室で行われていたが、英語のテキストや論文を日本語に訳すだけで精一杯。今と違って、パワーポイントのような、サクサクとプレゼンスライドを作るツールもなかったため、余計に大変でした。学会発表直前のグラフの修正は、一大事。ドタバタしたことを思い出します。

当時は、学術論文がどのような構成になっているのか（学術論文の組み立て）を教えてくれる講義もなかったもので、「こんなようなもの」と漠然と項目の並びを見ていました。学術論文の組み立てを明確に説明してくれたのは、テクニカルライティングのクラスの講師でした。パラグラフの最初の文（トピックセンテンス）を決めて、それを魚の背骨のように並べて全体のストーリーを構成するのが原則だから、よくできた論文は、トピックセンテンスだけを読んでいって内容が分かるはずだ、と聞いて、気を付けて読んでみると、確かにそうでした。もっと早く知りたかった、と思うと共に、「せめて、大学時代に、学術論文の構成や、英語の文章のパラグラフの立て方等の講義があれば…」としみじみ思ったのでした。

大学時代には、基本的なプレゼンテーションの仕方を教わったこともありません。教授陣のプレゼン、学会発表のときの発表者のやり方を見て覚えるだけです。つまり、これは、日本語でどのようにプレゼンテーションをすればいいのかすら分かっていない（＝良いプレゼンテーションができない）ということです。英語でできるはずがありません。加えて、英米人が理解しやすい文章の書き方もわかっていない、議論をすることにも大して慣れてはいる、というないない尽くしでは、英語でやりとりすることに対して苦手意

識が育たない訳がないと思います。

なぜそうなるかといえば、「日本は、高等教育まで母国語で受けられる、世界でも稀有な国だから」ということに起因するのではないかと思います。英語を聞いて話すという訓練の機会が相当に限られているのですから、聞き取ることがうまくできない、英語がうまく話せないということになるのは、ある意味当たり前です。

加えて、「聞き取れないことは恥ずかしい」、「文法的にも正しく話せないのはみっともない」という思いが拍車をかけ、その結果、質疑応答で立ち往生ということが起きてしまうように思います。

では、良いプレゼンテーションとはどんなものでしょうか。話し手が伝えたいことがきちんと伝わるもの、という一言に尽きると思います。文字で真っ黒になったスライド（少し離れた席からでは小さな文字は見えません）が映し出され、聴衆に半ば背を向けてスライドに向かって（いかにも自信がないように見えます）、小さな声でぼそぼそ話す（自信がないという印象をさらに強めます）、というプレゼンを見たことはありませんか？まるで、「私のプレゼンを聞かないでください。質問をしないでください。」と言っているようです。どんなに内容が素晴らしくても、これでは伝わりません。これは悪いプレゼンの典型ですから、この逆が良いプレゼンとなります。遠くからでもよく見えるスライドを作る（1枚のスライドに情報をてんこ盛りにしない）、聴衆を見て（聴衆に背を向けない）、大きな声ではっきり説明する、という3つに気をつければ十分だと思います。

英語を話す人達は、我々が話す英語を聞いて、どのような教育を受けたかを推定してきます。会社時代の英会話の先生、テクニカルライティングの先生は、いずれも、「高等教育を受けた人間はその教育を受けた者として一定以上のレベルの英語を話すべきだから、

スラングは使わないよう。」にというアドバイスをくれました。

また、アジアセミナーに参加したときに、英語を母国語としていないアジアの弁理士達が、英語が上手か下手かにかかわらず、堂々と疑問に思っていることを英語で質問し、納得するまで相手にくいさがつて説明を求めていました。その姿を見て、「英語ってこうやって使うものなんだ。」と認識を新たにしました。恥ずかしがっている場合じゃない、しっかり英語で説明しなければ、と気を引き締めはしたものの、その場で急に上手になるわけでもなく、説明するのに汗をかきました。

ツールとしての英語を使って、堂々と聞きたいことを聞けばいいのです。母国語ではないのだから、聞くことにも話すことにも少しずつ慣れていけばいいと思います。

恥ずかしがらず、楽しみながら淡々とこれからもツールとしての英語を磨いていきたいと思っています。



(2018年4月 AIPLA (Woman in IP Law メンバー)との交流会。世界最強の女子会かもしれない。)

(原稿受領 2018. 5. 21)